

団地を一つの大きな家族に

株式会社ぐるんとびー 特定非営利活動法人ぐるんとびー

株式会社ぐるんとびー 代表取締役 菅原 健介



団地内にある介護事業所

要旨

神奈川県藤沢市のUR都市機構の団地の一部屋にある介護施設。239戸、約478人が住んでおり、高齢化率は60%を超える。人々が幸せに暮らすには、「住み慣れた地域で、人とつながりながら役割を持ち、自分らしく最期まで生き切る」ための仕組みが必要であると考え、その実現のために、「団地を一つの大きな家族に」というコンセプトを掲げ、スタッフも同団地に移住、地域住民として団地で共に暮らしている。高齢者のみならず、子どもたちや大人との多世代交流を通じた実践により、団地に引っ越してくる高齢者、シングルマザーが増えた。

また、団地に小規模多機能型居宅介護という24時間365日対応の介護サービスが入ることで、サ高住や特養に移動せず、住み慣れた地域で最後まで暮らすことができる。団地内での看取りは90%を超えた。このような取り組みは、日本国内はもちろん、高齢化の進むアジアでも展開できる可能性があると国内外で評価され始めた。

1. 背景と目的

活動のきっかけは、東日本大震災だ。震災前の私は、回復期リハビリテーション病院で理学療法士に従事していたが、震災を機にその仕事を離れて、母が代表を務めていた全国訪問ボランティアナースの会「キャンナス」の被災地支援チーム現地コーディネーターとして働き、そのまま災害支援活動を続ける道を選んだ。支援に訪れた宮城県石巻市では、社会のインフラが津波に流され、既存の仕組みの多くが機能不全に陥っていた。友人を失い嘆く人。家や仕事を失い、生活の不安に押しつぶされそうな人。家族を失くし、自分だけ助かったことを責める人。そこには不安や悲しみがあふれていた。

そんな状況の中で、人を救ったのは人とのつながりだった。お互いの助け合い、声のかけ合いが、生きる希望を支える大きな力であり、その原点はご近所同士の助け合い、お互いへの思いやりだった。人のつながりの弱い地域では多くの支援を必要とし、地域コミュニティを活性化する仕組みの必要性を痛感した。同時に、災害支援活動のように寄付や補助金による活動にも限界を感じた。地域をつなげるハブとして、集合住宅に介護保険事業である小規模多機能型居宅介護を入れることで、平時から安定的に地域コミュニティの活性化につながる拠点がつくれると感じた。拠点施設としての役割と様々な世代の交流の両方の実現を目指し、「団地を一つの大きな家族に」というコンセプトでスタートした。

団地の一部屋を活用したものは既存にないモデルであり、地域や他の事業者理解されるのは難しかった。しかし、「常にこれが正し



UR都市機構パークサイド駒宮団地

いという正解はない」という対話の精神を基礎に仲間、地域の人と挑戦を続けている。また、「団地を一つの大きな家族に」という共同体としての意識や、対話という考え方については、代表である菅原が中学・高校時代を過ごしたデンマークでの影響が大きい。社名である『ぐるんとびー』も、デンマークの社会教育の父と呼ばれ、対話による相互作用の重要性を唱えた『ニコライ・F・S・グルントヴィ』に由来しており、日本の文化にデンマークの教育などを取り入れながら、『ほほほ幸せな毎日に感動できる豊かなつながりがある街をつくる』という夢に向けて活動している。

2. 活動内容と成果

1) 団地内での看取り率は90%

小規模多機能型居宅介護に看護師がおり、加えて、隣のマンションの1階にある看護小規模多機能型居宅介護や訪問看護ステーションと連携することにより、24時間365日切れ目のないケア（介護・看護・リハビリ）を状況に応じて提供することができるため、団地内での看取り率は90%を超える。

また、ぐるんとびーでは本人の“やる気”“強み”を引き出すケアを実践。「畑仕事がやりたい」「料理がしたい」など、本人が持っている生きる希望をケアに取り入れている。介護者が住民として共に暮らしている信頼関係と安心感そのものも“ケア”として機能し、要介護度の改善にもつながっている。

関わる誰もが「人生の小さな幸せ」を積み重ねるために。

ぐるんとびー企業ミッション

“その人らしさ”を認め、みんなの人生を最大化する
 あなたは素晴らしい人です。同じようにあなたと関わる誰もが素晴らしい人生の主人公であり、学ぶべき者です。私たちは全ての人生を尊重します。

Always Valuable Why for Everything.
 本当に正しいが分からない世の中だから、つねに前向きに、建設的に「誰かの（あなたの）当たり前」に疑問を持ち柔軟な発想で乗り越えます。

チャレンジと実行の共有を大切に、公平に評価する
 目の前で起っている難かのためにリスクを負ったチャレンジと実行が世の中を良くすると信じます。その共有を大切に、公平に評価します。

地域社会は子どもと大人の相互学習の場として活用する
 人生は学びの連続です。地域社会での世代や生活環境、仕事内容や価値観が異なる人と人の多様な交流を活用して、豊かな人間形成を目指します。

みんなが気持ちよく働き、助け合える環境を作る
 働くみんなの人生も最大化するため、お互いを尊重し合い、精神的にも、身体的にも、物理的にも安心して、心地よく過ごせる職場環境を作ります。

生活を支える専門家として向上心を持ち、粘り強く成長する
 生活（人生）を支える専門家として、介護や医療、福祉の専門性の向上はもたらん、ひとりの人間として学び、謙虚な姿勢で成長を続けます。

人との“つながり”が生む人生の豊かさを応援する
 小さな私たちがただでは解決できない問題が地域社会には山積みです。人との“つながり”が価値ある人生を作ると信じて、その機会を応援します。

ぐるんとびー企業ミッション

2) UR団地を活用した新しいコミュニティづくり～多世代交流、地域活性のハブとしての機能～

認知症や精神疾患のある高齢者をはじめ、若者、子育て世代の夫婦、シングルマザーなど、4年間で21世帯、39人が団地に引越し、共に暮らしている。スタッフと認知症のある高齢者や、地域のシングルマザーと認知症のある高齢者のルームシェアをマッチングすることで、要介護高齢者である前に、同居するおじいちゃん・おばあちゃんという認識で関わりができるようになった。

また、ぐるんとびーは団地の自治会とも福祉事業提携をしており（自治会パンフレットにも明記されている）、自治会公認の介護事業所、防災拠点にもなっている。生活と福祉の壁がなくなり接続されることで、スタッフやぐるんとびーを通じて地域活動に興味を持った若手が次々と自治会役員となることで、平均年齢76歳が40歳に下がるなど、自治会役員の若返りが実現、



団地内でルームシェアをする二人

自治会の持続可能性が向上した。

3) 低コストで展開可能

ぐるんとびーを整備する費用は約450万円。公募による助成金も使っていない。大きな介護施設をつくる必要がなく、視点を変えると同集合住宅内の239戸の部屋すべてがサービス付き高齢者住宅としても機能することが可能である。

【うまくいかないことを大切にする】

私たちは、福祉を健康改善の目的ではなく、まちづくりの観点から「団地を一つの大きな家族に」というコンセプトを掲げ活動に取り組んだ。これが成功した要因であると考え。収益事業としての福祉サービスではなく、あくまでも住民の互助活動をサポートする機能として既存の介護制度を活用した。それがない場合は生み出し、地域の隙間を埋めていった。

その結果、介護だけでなく、自治会活動や子育て、障がい、待機児童、不登校支援などの活動に広がり、そういった悩みを抱える人を支えることができています。半面、「住まいに介護が入ってくるな!」「株式会社なぜ地域活動をしているのかわからない」「団地を乗っ取ろうとしているのではないか」など一部の住民からの反発があり、株式会社とは別に、特定非営利活動法人ぐるんとびーを設立し、周囲が理解しやすい枠組みもつくった。

教訓として既存の方法論に捉われず、「常にこれが正しいということはない」という対話

を社内外問わずに粘り強く繰り返す。目の前の人にとって、よりよく生きるとは何かを考え行動すると、時には利用者や家族、スタッフや地域住民と衝突が起こる。一人ひとりの“ほどほど幸せ”な暮らしのためには、“ほどほどの不都合”も相互に譲り合い、のみ込む必要もある。失敗や衝突を恐れず、ぶつかっても怒られても、チャレンジを諦めないということが重要であるとわかった。

「健康、安全」ではなく「ほどほど幸せ」を目標とする意識も大切だ。健康や安全に偏りすぎると、生きる意欲が削がれていく。自分の人生を自分で決定できることは、人々が役割を持ち自分らしく暮らしていけることにつながっている。

私たちの取り組みの新規性は、すでにある団地の一部屋を小規模多機能施設として運営することで、住み慣れた地域でこれまでの絆を保つことができるということである。コストも、有料老人ホームや特養等の施設を新設するより格安である。

新たな切り口として、住民と企業が一体化して生活に溶け込むように福祉を提供する。介護する側、される側という枠組みを超えて「一住民として」居住する集合住宅を目指した。スタッフ約10名が住民として暮らし、一人の家族・隣人としてケアを実践し、その人の人生の物語に関わっている。地域の隙間を埋めるための小規模事業「まちかど」として、



自治会と共催の団地の八百屋



楽しく生きる!が人の“強み”を引き出す〜ぐるんとびーでのケアの日常〜

御用聞き、健康相談、司法書士相談、ママさんの産後リハビリ、子どものスポーツトレーニング、防災活動、八百屋、葬儀まで行う。その取り組みが各種メディアや国内外での評価※注につながっている。

【予算と財源】

開設コストは通常の小規模多機能型居宅介護事業所に比べて、6分の1程度と非常に安価である。初期コストは総額450万円（住宅改修費30万円、スプリンクラー等の消火設備370万円、テーブル・椅子等の必要備品50万円）。

毎月の売上概算：686万0787円／同経費概算：606万5160円／同利益：79万5627円／利益率：11.6%、と持続可能性が高く、飲食をはじめとした他の事業と合わせることで、さらに安定した運営が可能になることがわかった。

3.まとめと展望

私たちは、『団地を一つの大きな家族に』というスローガンを掲げ、設立から7年間、つながりの中でほどほど幸せを感じられる街づくりを目指してきた。団地をうまく活用することで、多世代の交流が生まれた。健康のために努力するのではなく、やりたいことや役割を通じて社会に参加していることで最期まで自尊心を持ち、ほどほど幸せに暮らしていける。

また、高齢になっても“いきいきと生きる姿”を次の世代に見せていくこと、弱っていく姿を見せていくこと、団地で葬儀を行いながら生と死を切り離さずに、あたりまえに死んでいく姿を子どもたちや地域で共有していくこと自体が、地域での次世代への生きる教科書だ。そして共に暮らすことを通じて起こる衝突、対話そのものが生きた学びになり、社会教育の学び舎にもなっている。これからは他の地域やアジア地域で



団地の子どもたちも自由に出入り



認知症の母をベッドに固定する手錠

の展開も視野に入れながら活動していくなど、活動を広げていきたい。

●暮らしの中のハイパーレスキュー設立へ

8050問題などと取り上げられるように、介護保険で支えられない現実と向き合うことも少なくない。

団地というコミュニティについては、上記のような一定効果は実証できた。ただ、理想だけでは支えられない現実がある。ぐるんとびーは災害支援から派生した団体であり、上記の取り組みの他にも24時間365日対応の看護やケア職によるレスキュー活動をしている。土日でケアマネジャーや包括支援センターに連絡がつかないが困窮している家庭からのSOS。介護保険制度の限度額では到底サポート量が足りず、虐待につながっている家庭の支援を続けてきた。

ある一定の人口に対して消防署が設けられ、人口10万人に対して通常の消防隊活動を超えた『ハイパーレスキュー』の設置が義務付けられているように、今後は介護事業所だけではなく、公益性のあるケアのプロによる『暮らしの中のハイパーレスキュー』が必要だ。現状、ぐるんとびーのボランティア活動として対応している“制度を超えたケアのレスキュー”についての活動も拡大していく。

誰もが“ほどほど幸せ”に暮らせる地域社会に向けてトライ&エラーを繰り返しながら、これからも活動をしていく。

※注）2020 Healthy Aging Prize for Asian Innovation Awards（第1回アジア健康長寿イノベーション賞国内最優秀賞・アジア準大賞）や第8回高齢者ケアイノベーション賞2020アジア太平洋最優秀ケア施設、2018・2021かながわ福祉サービス大賞受賞